

市場における 輸入野菜の位置

昨年は生鮮野菜の輸入量が94万7000tと、近年では最も多い2006年の数字に迫った。06年の場合の輸入増大要因は明らかだ。東京市場では夏場を中心とした日照不足と天候不順による入荷減が影響し、平成に入ってから最少入荷量となった。一方、昨年は春と秋に高値があったが、夏場は暴落と

いう具合に単価が引き金になった。背景や事情は異なるものの、全体的には入荷減の単価高が直接の要因のように見える。ただし、品目によってはそれぞれ背景が違うことに留意しておく必要がある。加工業務用の比率が高く、輸入数量の上位品目から個々の状況を検証してみたい。

タマネギ

単価100円を超えると輸入増に。年間を通じてサラタマの需要開発を

【概況】

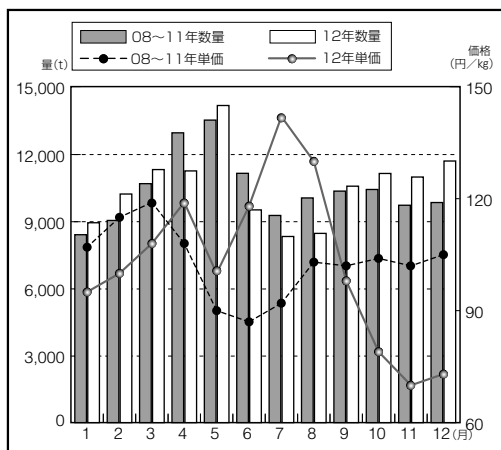
東京市場のタマネギは、年間13万t以上の需要があり、キロ単価は90円前後が適正だといわれる。ところが、09年以降は入荷が12万t台で単価は100円を超えている。そのため、昨年はタマネギの全体の輸入量が34万tを突破し、東京市場にも中国産を中心に1万t近くが入荷した。春から夏にかけてが多く、主産地である北海道産の不作と連動する。中国産の真空包装剥き品はキロ80円で流通した。

【背景】

タマネギは国産の豊凶によって輸入量が決まる。豊作の08年は輸入量が18万tにとどまり、東京市場でも輸入品は3000t程度だった。キロ単価は80円である。この年は生鮮輸入野菜も60万tで済んだ。ただし、タマネギは最も基本的な食材であるため、加工業務用では一定程度の輸入品需要はどうしても無くならない。剥き品(裸)ならキロ60円、脱気包装してあっても80円で購入できることから、不安定な国産品への依存率は低下傾向にある。

【今後の対応】

輸入野菜がとにも多かつた昨年と06年を比べると東京市場へのタマネギの輸入品は3分の2に減っている。これは、市場流通を使わない直接調達が必要が増えたということだ。対策は2点。どこの道県でもタマネギの地場需要向けの生産を導入すること。もう一つはタマネギの一般需要を開拓することである。例えば、年間を通じて「サラタマ用タマネギ」は家庭に定着する可能性が高い。品種や貯蔵法、用途提案などを工夫して生販が連携したい。



ニンジン

単価は関係なく輸入は増勢傾向。どこの地域でも増産がテーマに

【概況】

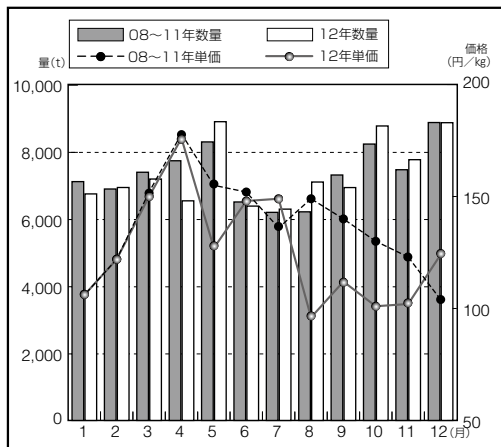
東京市場のニンジンの入荷は年間9万t程度、単価は120円前後が通常だ。生鮮野菜の輸入が少なかつた08年はニンジン全体で4万tほどの輸入量で、同市場では年間平均140円を上回ったが、輸入品の入荷は1000tを超えなかつた。ところが、10年から140円に達すると毎年、中国産だけで2300~2400tも入荷している。昨年は120円強だったにもかかわらず、なぜか輸入品の割合は減っていない。

【背景】

昨年の場合、3~7月の相場が高く、170円を上回る月もあったが、8月からは北海道産の出回りで一気に100円を割り込んだ。年間平均では120円だった。いわゆる春ニンジンは前年もこの時期に200円近い相場が出るなど、このところ不安定で、輸入が恒常化する傾向にある。近年、ニンジンの加工需要が大幅に増えており、昨年は4万tの生鮮品のほかに生鮮換算で20万t近いキャロットジュースが輸入された。

【今後の対応】

根物類の割には意外と天候の影響を受けやすいニンジンは、どうしても国産の作柄が不安定になりがちで、加工原料として輸入が恒常化してくるのは避けられない。各地で始まっている加工向け生産の成長を待つしかないだろう。ただし、いま国産でもキャロットジュースにして飲むための甘くて軟らかく、カロテン含有の多いニンジンを生産、流通が増えつつある。とにかく生産の拡大はどこの地域でも課題に挙げられる。



今年の市場相場を読む

流通ジャーナリスト

小林 彰一

青果物など農産物流通専門のジャーナリスト。(株)農経企画情報センター代表取締役。「農経マーケティング・システムズ」を主宰、オビニオン情報紙「新感性」、月刊「農林リサーチ」を発行。著書に「日本を襲う外国青果物」、「レポート青果物の市場外流通」、「野菜のおいしさランキング」などがあるほか、生産、流通関係紙誌での執筆多数。

ネギ

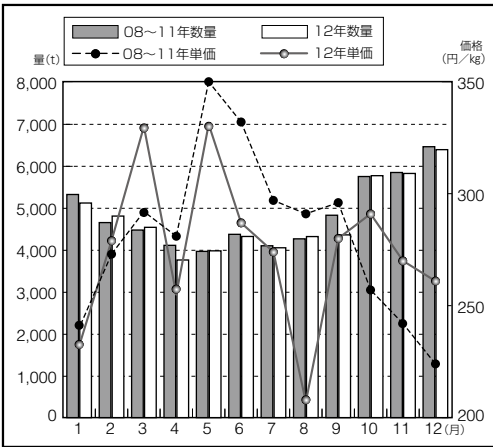
【概況】 東京市場の昨年のネギの入荷総数は5万7000tで、そのうち輸入品は2500tだった。全体の輸入量は前年並みの5万2000tであることから、ちょうど5%程度が同市場に入った勘定だ。ただし、近年では輸入の少なかった08年でも2100tの入荷があった。同年の年間入荷量は6万1000tのため、シエアは低い。両年とも年間キロ単価は270円台であり、高かったから輸入されたという理由は成立しない。

【今後の対応】

ネギは、生産者にとって作りやすい品目であり、昨今では調製作業も機械化が大幅に進展した。年間5万tを超える輸入が恒常化する現状は、かつてセーフガードが発令された時期より問題が深刻化している。ターゲットは明確だ。5kg箱当たり需要者渡しで1000円が中国産と競合できる価格だが、加工業務用に特化した産地作りというよりは産地の大型化や広域一元的な集約で一般出荷用から加工業務用まで全方位に対応できる産地化が望まれる。

【背景】

国内産の豊凶は輸入の増減にあまり関係なく、輸入品を支持する底堅い需要がある。タマネギやニンジンも輸入量の3%程度が同市場に入荷しているのに対して、ネギは5%の割合で入荷している。大口需要者は輸入品については市場流通を使わないが、中小の需要者は市場で輸入品を手当てしている背景がある。ネギの食料費に占める割合を考えると、加工業務用需要全般に中国産への依存を高めているという深刻な事態になっている。



キャベツ

【概況】 高騰・品薄になると速攻で緊急輸入。問題は年明けから春までの生産体制

【今後の対応】

緊急輸入されると中国産や韓国産といえども市場ではキロ70〜80円になる。これは通常のキャベツの価格である。本来はカット野菜用のキャベツは産地との契約価格で60円前後でないとペイしない。高騰や品薄という事態が起こりやすい年明けから春先までの時期の、加工業務用キャベツ生産に大きな問題があることになる。関東の春キャベツの産地は加工業務用に向く寒玉生産に後ろ向きだ。現在の国内の生産体制からすると本来、輸入は不要のはずだ。

【背景】

キャベツは、国内生産の最も多い野菜の一つで、どのシーズンでもどこの産地で多少の差はあっても生産がある。一般家庭需要でも加工業務用でも広く使用される常備野菜といえる。ただし、キャベツが高騰すると一般家庭では代替野菜で済ませることができ、加工業務用ではどうはいかない。高騰は加工業務用が最も困る品薄や手難の裏返しであり、これら需要者に対応するベンダーはどんな手段を使っても調達しなければならぬ。

